

『進化は万能である』人類・テクノロジー・宇宙の未来

マット・リドレー著 早川新書 第九章 人格の進化

はじめに 担当：松本

- ・ ジュディス・リッチ・ハリスは心理学の本を執筆する機会を受けていたが、しばらくして自分の書いている内容に賛成できなくなった。
- ・ 当時心理学は親が子供の人格を形成し、子供どうしの違いは親が引き起こすという考え方に囚われており、唯一の疑問はどのように？だった
- ・ 例として子供が親に似ていることを主張している論文を取り上げているが、これでは遺伝的な影響について論じてさえいなかった。
- ・ これは人の頭の中にあることの事実上すべては外部に由来するという、20世紀の強力なドグマの表れ
- ・ 1960年代には、すべてを親や幼少期の影響のせいにする傾向は、滑稽なほど極端になり、映画や小説でも書き出されるようになった。そんな中で反抗の火の手はやまなかった
例：カッコウ
ほかの動物が自然淘汰で細部まで磨きをかけた本能を与えられているのに人間は教えに満たしてもらおうという状態なのか
一卵性双生児の子は別々の場所でも似通った人格や知能を示すことが多く、対照に養子と一緒にいても異なることが多い。

無力な親たち

- ・ 1993年タブラサ説を従順になぞりながら教科書作成をしていたハリスは賞罰を行う親の行動が子どもの人格の源泉であるという考え方に疑問を抱き始めた。
- ・ 一卵性双生児の証拠から人格を決めるのに遺伝子が大きな役割を果たしているように見えた
- ・ 子どもの人格は現に親の人格に似る傾向にあったが、それは親の遺伝子を受け継いでいるからかもしれない
- ・ ハリスは子育ての重要性は過大評価され、親は騙されてきた。
- ・ 子どもに冷酷だったり、子どもを放任したりするのはたしかに良くないが、それは子供に対して思いやりが欠けているからであり、子供の人格を変えてしまうからではない。
- ・ 親が重要なのは、間違いないがそれは親が子どもの世話をし、愛情を与えるからであり、親がいなければその影響は大きい子育ての仕方の違いはたいしたことはない。

- ・人格の違いはそのおよその半分が遺伝子の直接・間接の影響で生じ、およそ半分が何かから生じる。
- ・ハリスは実験結果から「子どもから親への」影響がよく見られることを強調する
- ・ハリスの主張に反対する人たちによって名誉を挽回したが、心理学の専門家と実践者は依然として親の影響力を信じ続けているが、考え方は絶えず後退を余儀なくされている
- ・子どもたちは人格を、おもに自分の中から獲得するのだ

地位指数

- ・人格の差異の半分は何が原因なのか。
- ・ハリスはもっともらしい説5つを挙げるが次々に退ける。
- ・人間は成熟するにつれ、社会化し、関係を進展させたり地位を獲得したり、認めたりするために社会的システムを発展させること指摘。
- ・自分と同輩と同じようになることを学び、関係を結ぶ上で異なる人々を区別し、異なる人には異なる行動をとる
- ・そして10代になると同輩グループの中で地位を高めようとし始める。男性女性も同輩のあいだで自分が相対的にどれだけの地位を占めるとするかに基づいて、10代なかばに自分の人格の一部を定める傾向にある。これが人格の差異の原因だとハリス主張
- ・上の説明の長所は一卵性双生児に見られ、お互いの人格をはっきりと区別する傾向があり、第三者が差を強化する
- ・人格の差異は、親ではなく遺伝子とランダムな影響の組み合わせでできるのだ。
- ・育ちによって人格が決まるという仮定は多くの要因によって勢いづいていたが、それが好ましく思えたそもそもの原因は、私たちは誰かが管理していると考えられずにはいられないことにあった。だが人格は環境に反応して内面から展開してくるのであり、本来の意味で進化するのだ。

コメント

当時は人格形成において親の影響が大きいと考えられており、子育てが大事であった。これは親にとって大きな不安であったのではないかと思った。人格において遺伝の影響だなど思うことはあるのだろうか。自分は思ったことはない。

個人的には周りの環境が人格に大きく影響していると思う。周りが勝手に感じたものの押し付けが人格を形成してしまう恐れがあるのではないだろうか。

内から現れる知能 担当：藤井

- ・知能の差異は、遺伝子の差異に負うところが非常に大きい。
 - ・子供の将来性に関する宿命論につながると危惧されていた。
- 知能を遺伝の観点から眺めたからといって、それが即、宿命論に繋るとは限らない。
- ・もし知能があまり遺伝的なものではないのなら、大学への入学枠を広げて、経済的に豊かではない家庭に育てている才能豊かな人間を探し出そうとする意味がなくなる。もし、育ちがすべてならば、質の低い学校に通った子供たちは頭の質も悪いとして切り捨てられることになる。
- 社会的流動性という発想は「生まれ」はありながら「育ち」そこなっている人を見つけ出すことがカギ。
- ・知能の遺伝率は年齢とともに上がる。
- 年長のこどもや大人は、自分の好みに合った環境を探し求めたり生み出したりして、自分の本性を強化するため。
- ・経済的な平等性が高まると、知能の遺伝率が上がる。
 - ・「遺伝は重要であり、知能は社会が押し付けたものではなく、子供の創発的特徴で、育んでやるべきものである。」

性的特性の生得性

- ・同性愛はそれまで思われていたよりも生得的で変え難く、幼少期や青年期の強化のせいである度合いが低いことが明らかになった。
- この知らせを同性愛者たちは熱烈に歓迎した。
- ・若い人々が年長の同性愛者によって同性愛者に仕立てられるようなことがあってほしくないと思う者もいた。
- 性的特性はもともと人が持って生まれたものであることが判明したため、その偏見の根拠は崩れ去った。青年期に教化されることで同性愛が起こりはしない。
- ・人間はおもに内から、下から造られるのであって、外から、上から造られるのではない。
 - ・玩具店は、ピンク色の女の子用の売り場と、青色の男の子用の売り場にわかれている。
- これを性差だとフェミニストは言い、支配的な文化によって子供たちにそれが押し付けられていると言い張る。
- ・親が男の子にはトラックを、女の子には人形を買うのは、彼らが支配的な文化の奴隷だからではなく、それが子供たちの望むものであるのを知っているからだ。
 - ・性差別であふれ返る玩具店の売り場は人間の生来の好みに応じているのであって、その好

みを生み出しているのではないことが今や決定的に示された。そうした違いは、押し付けられたのではなく、進化したのだ。

殺人の進化

- ・動物は本能に頼り、人間は学習に頼るといふ、戦後の支配的な見解もまた、典型的な人間の行動の多くについて進化で説明がつくことが明らかになって、崩れ去った。
- ・哺乳動物の種でメスの繁殖能力は希少な資源であり、それを巡ってオスが争う。
→子孫を残そうとするため。
- ・世界の歴史を通して、男性が男性を殺すほうが女性が女性を殺すよりもはるかに多い。
→過去に繁殖の機会を巡って争うように生物学的作用に強制されたため。
- ・殺人の犠牲者と加害者になる確率は、男性の方が大幅に高く、青年期で頂点を極める。
→女性を巡って若い男性が若い男性を殺すため。
- ・その種の本能を自然淘汰が人間に与えたと考えれば、ほとんどの殺人は説明できる。
- ・行動の原因は進化に求めるべきである。

性的魅力の進化

- ・男性と女性に、短期間の関係あるいは長期間の関係を結ぶ相手として、どの年齢の異性が最も魅力的に思えるかを調べる研究が最近行われた。すると、両性の間ではっきりした違いがみられた。
- ・女性は短期と長期の関係の両方で、自分とほぼ同じ年齢のパートナーを好むと答えた。
- ・男性は短期間の関係や性的空想の対象として20歳の女性を最も魅力的だと感じた。
→どの年齢の男性も、生殖能力が最大である年齢の女性を最も魅力的に感じるのだ。
- ・この現象の説明を求めるべきは、文化的規範ではなく進化の世界である。
- ・私たちの情動や能力は、外ではなく内に由来する。私たちが学習できるのは、学習のための生来の仕組みが私たちに備わっているからだ。学習は本能の反対ではなく、それ自体が一つあるいはかなり多数の本能の表れなのだ。
- ・社会決定論と文化決定論と親決定論が崩れ、人間の人格と特徴に関する、よりバランスの取れた進化論がそれにとって代わったのは、文化的特殊創造説からの解放なのだ。

コメント

日付：2018年11月14日

担当：松本 藤井

知能は遺伝による影響が大きく、育ちはあまり関係がないということが分かった。私は二卵性の双子であるが、双子でも学力の差に大きな違いがある。双子の場合は学力も大体同じだと思われがちだが、いくら双子とはいってもすべてが同じようになるわけではないので、双子でも学力の差があっても不思議ではないと思った。